

## 第46回日本保育学会報告 II

# けんか場面と保育者

### 3歳児のクラスで

中村 万紀子

\*保育者が子どもに『どうしたの』と聞くのは、  
裁判官のようですね。

この言葉を本園の元園長、藤土圭三先生（カウンセリ  
ングが専門）になげかけられ、私は無性に気になりました。  
た。今まで何のためらいもなく、けんかの場面では特に  
よく使っていたからです。幼稚園の中ではよくけんかが

起きており、自分達で解決がつかなかったり、どう気持ちの整理をしたらよいかわからず戸惑ったりしている時  
や、何だかいつもと様子が違うなど気になった時に、私  
は『どうしたの』とそこへかかわっていき、子どもと一  
緒に考え、解決の方向を見つけようとしてきました。

実際の状況を自分がよく把握できない場合、尋ねる意  
味で『どうしたの』と聞いていたつもりでしたが、その

時々で保育者の感情も影響して、いろいろな響きの「どうしたの」が口に出てきたり、解決の方向へ急ぐあまり、子どもの今おかれている状態や気持ちを理解することがおろそかになり、「いったいどうしたの」と早く白黒つけたいというあせりがもしかすると表れてはいないかと疑問を持ち、反省するようになりました。

子どもと一緒に生活している保育者は、やはり判決を下すような裁判官であってはならない、よき理解者としてのかかわり方がまず大切にされなくてはならないだろうと思っています。子どもをどう理解するか、実際の保育場面で自分の対応はどうなのかを、けんか場面の事例を通して考察し、見つめ直したいと思います。

## ＊物のとり合いの場面

### 〈事例一〉 十月十七日

ドングリが入っているボウルをK君が持っている、R君が黙ってそれを取ろうとする。K君「だめ、僕が

使っているの」と断るが、R君は聞かずに力づくで取り上げる。K君は腹がたつたのだろう、R君を叩く。するとR君は足で蹴り返す。K君「返して」と泣きながら言う。R君は自分に抵抗してくるK君をどう感じたのだろうか、泣いているK君を片手で突く。K君は床に倒れて大声で泣き出す。いつ入ったらいだろうか、K君とR君のどちらへ先にかかわったらいかと迷いながら側で様子を見ていた私は、K君が床に倒れて泣き出した時、まずK君の気持ちに自分がなってみようと思い、「K君悔しいね」と声をかけるとK君はうなずく。K君を膝に乗せ、痛いという胸を擦りながら、「R君は貸してって言わずに取っていったね」とけんかの状況をK君と確かめるつもりで言う、R君が取り上げたボウルを持って「貸して」と言ってくる。K君「いやだ、僕がつかうんだから」と怒った顔で言う。ドングリが欲しかったんだと思い、私はR君に「まだいっぱいあるよ」と紙の箱に入っているドングリを見せるが、「いやだ、こっちがいい」とR君は言う。ドングリよりもステン製のボウルが

欲しかったことに気づき「K君と同じ入れ物が欲しかったのかな」とR君に尋ねると、K君は黙って立ち上がり、ままごとの棚の中から、ステン製のボウルを探してきて、「はい、R君」と言って渡す。二人は何ごともなかったかのようにドングリと油粘土でごちそうを作って遊び始める。

\*

私は裁判官ではないという思いはあったものの、このけんかの場合に保育者はどうかかわったらいかに迷いました。確かにRの行動はよくないし、そのことを気づかせなくてはならないとも考えました。一方、KとRのそれぞれの気持ちを理解することも大事なことから始めてみました。同じ入れ物が欲しかったことを受け止めると、けんかはおさまっていきました。物のとり合いは、三歳児の場合、あの子と同じ物が欲しい、使ってみたい、あの子と一緒にいいんだと思う気持ちの表われと考えると、友達と同じことをして遊びたいと思

う気持ちを大事に考え、同じ物がいくつか揃っていることは、大きな意味があると思います。

#### 〈事例二〉 十二月四日

Y君はこの頃、毎日のように年長のクラスにおいてあ



る恐竜のマスコット人形を借りては持ち歩いて遊んでいる。前日返し忘れた恐竜のマスコットがこの日は朝から保育室におかれてあった。

登園してまもなく、M君が私の所に来て「Y君が僕の恐竜取った」と言う。Y君の姿が見えないので、M君と一緒に探しに行くと、Y君はいつもの恐竜を手に入れた。私「M君が先に使っていたのじゃないの」と聞く。

Y君は黙って振り向きもせず遊ぶ。私「Y君、黙って取ったらいけないよ、僕も使いたいよ」と聞くが、Y君は黙々と遊び続ける。M君は「僕の、僕の」と泣き出す。これ以上言っても無理だろうと思い、私は恐竜のマスコット人形が置いてある年長のクラスにM君を連れて行くことにする。それまで黙っていたY君が後からついてくる。私「M君いろんな恐竜がいるでしょう。お兄さん達に貸してもらおうか」と話しかけると、ついてきたY君が別の形の恐竜を一つ選んで「これMちゃんの」と渡そうとする。それでは気にいらぬのかM君は怒ったままその場から離れていく。

\*

事例一に比べこの時の私の対応は「黙って取ったらいけないよ」と、保育者にはその時の行為をうわべだけでとらえ、早く解決させようと思いがみられます。MとYのそれぞれの気持ちになってみた対応がなく、すぐにYに對し注意をしています。が、うまくいきません。この日は子ども達とラッカセイを炒って食べる予定があり、そろそろ始めようかと考えていたので、ゆとりを持った対応ができなかったのかもしれない。Yが今までずっと大事に遊んでいたこと、その姿をMは毎日見ている分もほしいと思っていたのかもしれないこと、この日も使っていないその恐竜を最初に見つけたMの喜び、いつも自分が使っていた物を他の子が使っていたのを見た時のYのショックなど後から考えると、もう少し二人の気持ちにその場で近づくことができたのではないか、そうすればまた違った展開があったのではないかと反省します。『貸して』というルールを言葉で教えこむのではなく、気持ちに訴えることで、その子がおのずとわかって

いくような保育者の対応ができたらと思います。

### \*いつもと様子が違うと感じた時

#### 〈事例三〉 十月二十日

運動場の隅に一人でいるK君を見かける。疲れているようにも見えたので、私は遠くから手を振ってみたが、

K君の笑顔はみられず私の方を見ている。いつものK君だったら走り寄って来るだろうに……と気になって近づく。どうしたの？ と聞きそうになったが、これはいけないと考え「元気がないね」と声をかける。K君「僕が持っていたのをR君が取った」と言う。私「それは大変だ、それで僕はどうしたいの」と聞くと、「取り返したいの」と答える。私「じゃR君の所に行こうよ」と誘うと、K君「僕ずーっと探しているんだけど、R君いないんだよう」と悲しそうに又怒ったように言う。私が「先生も一緒に探してあげる」と言うなり、K君は急に元気になってまずは保育室のある方へ走り出す。K君の持つ

ていたらしい物はりんご箱などに敷いてある発泡スチロールのネットということがわかったが、それはR君の発想でソーメン屋さんになっており、数人の子が遊んでいたで、別のネットを取り出してあげると、K君はもうそれには興味を示さず、別のもっといい廃材を見つけたと満足して遊び出す。

\*

この事例は、けんかの場面を知らずに、何かしら様子のおかしいKの姿がたまたま目に止まり、保育者がかかわっていった事例です。子どもがそれぞれの場でいろいろな遊びをしている中で、保育者がそのすべてを把握することはできません。子どもとの信頼をもとに困った時には先生に言ってくるだろう、四歳、五歳と成長する中で、除々に自分たちで解決し、乗り越えていくことともうまくなつてほしいと願い、そのように支えていきたいと考えています。もしかするとKは自分なりにつらさを乗り越えようとしていたのかもしれませんが、私は気になり、Kの気持ちに近づこうと「どうしたの」ではなく、

「元気がないね」と声をかけてみました。それがかえってよい方向へいったのではないかと思ったのは、もし私がKの立場だったら、「どうしたの」と理由を聞かれるよりも、「元気がないね」と声をかけられた方がホッと心がなごむのではないかと感じたのでした。先生は見てくれたんだと逆に、それまでの悲しさから解放され、心が安定するのではないだろうか、そしてそこから先を子どもは自分から見つけようとするのではないだろうかかと思えます。

### ＊よくけんかのもとになる子に対して

#### 〈事例四〉 十二月十日

K君とH君がBブロックで飛行機を作っている。R君が来て、K君の飛行機を取って行く。K君は大声で泣く。私「またR君、K君がこんなに泣いているでしよう。どうしてお友達の大事な物を取っていくの」と叱る口調で言っていると、R君と仲良しのH君も同じように

怒った口調で「もう遊ばんぞ！俺んち、もう来るなあ」と言う。私「K君やり返しよ」とつい言ってしまう。K君が叩くとR君も叩き返す。二月生まれで体の小さなK君と五月生まれで体の大きなR君ではK君の勝ち目はなく、痛々しくも感じ見ておられず、やめさせる。K君は自分のBブロックの飛行機が戻ってくると安心する。R君は涙を浮かべながら「K君が作ってくれないだもん、もう自分で作る」と敵しい表情で作り始める。

＊

私が「またR君」と感情的になり、R自身を否定するような言葉を言ってしまったために、仲の良いHまでもが「もう遊ばんぞ！俺んち、もう来るなあ」とRを責める結果となりました。又、「K君やり返しよ」と明らかに力の差はわかっているはずなのに、こんなことを言ってしまったために、Kにはますます痛い思い、悔しい思いをさせてしまいました。この時、私はとても後味の悪い思いをしました。どの子に対してもすまないという思いが残り、こういうことがあった日、保育者はとて



▲ 保育室風景

も疲れてしまいます。

よくけんかのもとになるRは、特にKに対して思い通りにしてしまいがちです。何でも取っていく、壊していく、幼稚園で発散しないとおさまらないような何か背後にあるのではと感じつつ、どうしたものか様子を見ているつもりでしたが、ゆとりが持てなかったのでしょうか、事例二と同様とてもまずいかかわりをしてしまいました。保育者にとって十二月は、やらなければならぬ諸々の予定や計画があつて忙しいのでしょうか。「K君が作ってくれないんだもん、もう自分で作る」の言葉に引っ掛かりました。Rは人の物がすぐ欲しくなり、そこでいろいろな問題が起きてきます。そのけんかを大切にしなければ、丁寧にみなければと反省します。人の物を黙って取っていく行為は断りつつげながら、Rの気持ちに近づき理解できれば、保育者が作ってあげることもできたろうし、Kが作ってくれるのを待つことも考えられると同時に、作ってもらった喜びから「僕ならもつとうまく作れるよ」と発想の豊かなRのこ

とだから、そのようになっていったかもしれない、と次々にいろいろな思いがでてきます。まずいかかわりで始まったけれど、Rが厳しい表情で作り始めた時に、見ているままに終わらず、そこでRへのフォローが必要だったように反省します。「そうか、R君の気持ちがかかったよ」と私も素直にRの気持ちに近づいていくことを続け、本当はこの事例の先のRへのかかわりがさらに大切だったのだと考えます。

## おわりに

三歳児の場合、よくけんかの原因になる物のとり合いや待てないことは、表面から見れば自己中心で良くない行為だけれど、『友達と一緒にことがしたい、自分もしてみたい』という気持ちが強く表れた結果のことではないかと思います。そのところの互いの気持ちを保育者がしっかりと理解した対応をしていけば、きっと相手の気持ちを考え、いずれ譲るとか待つとかいうこともでき

ていけるのではないかと考えます。

一方、破壊的な行為をして起こる衝突には、保育者との信頼を基に、寂しさや不安感から解放され、人との関わり方が徐々にうまくなっていけるように、特に愛情を持って、安定して遊べるように支えてあげる必要があると考えます。

このように頭ではわかってはいるつもりでも、実際の保育の場面ではつい感情的になったり、ゆとりがないと裁判官的な対応になったりとなかなか考えているようにはいかず、失敗の繰り返しです。失敗して再出発しながら自分自身も子どもから学び、育っていききたいと思っています。

(山口大学教育学部附属幼稚園)